

## 若手研究者支援の 取り組みについて

2009年10月17日に代表理事に選出されたときに、私は、自分自身が院生時代にこの学会に参加し、研究報告をしたりしながら、諸先輩に励まされ、文字通りこの学会に育てられたことを想起し、昨今の厳しい環境のもとに置かれている院生や専任職に就いていない若手研究者たちを支援する方策を学会としても考えていきたいとの主旨の発言をさせていただきました。

そして、2010年2月20日および6月27日に開催された理事会での審議を経て、いくつかの若手研究者支援の仕組みができあがりました。一つは、研究奨励賞の制定であり、もう一つは、大会で報告する院生会員への旅費の補助制度です。

研究奨励賞は、その規程によれば、「学会誌『ロシア・東欧研究』への投稿を奨励し、掲載論文の水準向上を図る目的から、学会誌に掲載された若手研究者による論文の中で特に優れたもの、研究の発展性が見込まれるものに対して、研究奨励賞を授与する」ものであり、対象者として「本学会に在籍する会員のうち、投稿時点において40歳未満であり、本学会での活動を継続する見込みのある者」としています。そして、この規程に基づき、浜由樹子会員が研究奨励賞の第1回受賞者となり、2010年10月23日に天理大学で開催された2010年度ロシア・東欧学会総会で表彰されました。

他方、大会で報告する院生会員への旅費の補助制度は、院生会員の申請に基づき、やはり2010年10月の天理大学において開催された2010年度（第39回）大会から実施されましたが、こちらの方は思いのほか利用者が少なく、改善すべき点があるよう

です。例えば、補助金額の上限をもう少し引き上げる必要などがあるかも知れません。

また、若手研究者の支援の仕組みというのとは少し違いますが、院生幹事制度をつくり、院生会員の組織化を進めて、院生会員同士の情報交換の場を提供することにも取り組んでいます。

さらには、まだ思いつきに過ぎませんが、例えば、院生に対する研究費の支援や資料調査等のための海外渡航費の支援なども考えられるでしょう。あるいは学位論文などの出版支援なども考えられるかも知れません、もちろん、既存の奨学金や助成金の制度もあり、あるいは各大学の独自の支援体制もあるとは思いますが、ロシア・東欧学会として、学会ならではの若手研究者の支援体制づくりを考えていければと思います。

こうした若手研究者の支援体制づくりについて、会員諸氏からのご意見やご提案がありましたら、どうぞ事務局までお寄せいただければ幸いです。寄せられたご意見やご提案は、理事会で検討させていただき、導入できるものはぜひ導入していきたいと考えています。今後とも、会員諸氏のご協力とご支援をお願いいたします。

(代表理事：上野俊彦 上智大学)

## 研究奨励賞第1号 浜由樹子会員が受賞

学会誌に掲載された40歳未満（投稿時点）の会員による論文のうち、査読評価の高いものなど、会誌編集委員長が候補論文を選定しました。なお、今回のみ、第37号と第38号の2号が選考対象となりました。その後、宇多文雄、伊東孝之、香川敏幸、木村崇、藤本和貴夫各理事から成る5名の選考委員による最終選考が厳正に行われ、その結果が代表理事

に通知され、理事会において承認されました。

総会で宇多選考委員長から選考結果が公表され、受賞者に浜由樹子会員（津田塾大学）が選ばれました。浜会員に対して、上野俊彦代表理事から賞状と副賞5万円が手渡されました。今後、若手研究者による学会誌への投稿が活発化することが期待されます。

### 研究奨励賞選考報告

選考委員会において候補作品を慎重審議の結果、浜由樹子会員の論文「『ユーラシア』概念の再考：『ヨーロッパ』と『アジア』の間」を表彰にふさわしい作品と決定いたしましたので、ご報告いたします。

同会員はこの問題についてこれまでですぐれた研究成果を発表してきましたが、本論文においては、これまでに言及の少なかった国際関係に注目しつつ広範な視点から論じ、新しい知見を随所で披瀝して先行研究を超えようとする自己の立場を明確にしている点、またユーラシア主義という思想と運動に関する議論を再活性化しようとしている点などが高く評価されました。研究対象分野と地域が多様である本学会において、広い層の読者の関心をひきつけ得る問題の提示及び扱い方が見られたという点からも委員多数の支持を得ました。

（研究奨励賞選考委員長 宇多文雄）

### 浜由樹子会員の略歴

現職：津田塾大学国際関係研究所研究員

学歴：津田塾大学大学院国際関係学研究科（博士号取得）、モスクワ国際関係大学(Research Visitor)、ハーヴァード大学デイヴィスセンター(Visiting scholar)

著書：『ユーラシア主義とは何か』（成文社、2010年）

主要論文：“Eurasianism goes Japanese: Toward a Global History of a Russian Intellectual Movement,” in Mark Bassin, Sergey Glebov and Marlene Laruelle eds., *Classic Eurasianism: Nation, Empire and Sciences in Russia*, American University Press, 2010 (forthcoming). 「プーチン政権下の『ユーラシア』概念」木村汎・袴田茂樹編『アジアに接近するロシア—その実態と意味』（北海道大学出版会、2007年）49-67頁。

### 研究奨励賞規程

1. 賞の目的と名称  
学会誌『ロシア・東欧研究』への投稿を奨励し、掲載論文の水準向上を図る目的から、学会誌に掲載された若手研究者による論文の中で、特に優れたものの、研究の発展性が見込まれるものに対して、研究奨励賞を授与する。
2. 対象者  
本学会に在籍する会員のうち、投稿時点において40歳未満であり、本学会での活動を継続する見込みのある者を対象とする。
3. 受賞者の数  
原則として、受賞者は当該年度1名とする。
4. 選考方法  
学会誌に掲載された論文のうち、会誌編集委員長が候補を数編提示し、理事会で選任された5名からなる選考委員会が審査を行い、理事会が承認する。選考委員の任期は1年とするが、再任は妨げない。ただし、審査を行う時点において、選考対象者と同一組織に所属する者又はその指導教員は選考委員から除外される。
5. 表彰  
原則として、表彰は研究大会時に行い、表彰状と副賞が授与される。
6. 受賞の取り消し  
本規程に反する事実が判明した場合には、受賞を取り消すことがある。
7. 規程の改正及び廃止  
本規程の改正及び廃止は、理事会の決定による。

### 浜由樹子会員受賞の言葉

この度はこのように名誉ある賞をいただき、ありがとうございます。

堅実な実証研究を目指して史料を読み込んでいますと、ついつい自分が実証しようとしていることの意味を見失ってしまうことがあります。この論文を書きながら最も意識したことは、実証と大きな文脈との間の往復運動でした。この度の授賞に際して、その往復運動の部分を評価していただくことができたのだとすれば、これ程嬉しく、また励みになることはありません。

この論文は、ロシア・東欧学会の研究大会での報告をベースにしたものです。執筆にあたっては、いただ

いたご質問やコメントに対してどうかお答えしようという内容を練り直しました。その意味で、これはロシア東欧学会にチャンスをいただき、育てていただいた研究成果だといえます。この場をお借りして、いつもご指導下さる先生方に心から感謝申し上げます。同時に、研究「奨励」賞の名に恥じることはないよう、これからもより一層努力してまいりたいと思っております。どうもありがとうございます。

## 天理大学にて 2010 年研究大会実施

2010 年 10 月 23・24 日の両日、天理大学（奈良県天理市）にて、2010 年（第 39 回）ロシア・東欧学会 JSSEES 合同研究大会が実施され、両学会合わせて約 100 名の会員が参加しました。

本年の共通論題のテーマは、「体制転換の 20 年—ロシア・東欧の軌跡」であり、研究報告形式の第 1 セッションと、パネル・ディスカッション形式の第 2 セッションの二部構成という新しい試みとなりました。司会、報告者、討論者、パネリスト合わせて総勢 10 名が参加するという充実した内容となり、参加者からも大変好評でした。後半のパネル・ディスカッションに関しては、院生幹事の協力により記録が作成され、次号の学会誌に掲載される予定です。

また、自由論題に関しては、従来は当学会と JSSEES がそれぞれ並行開催していたものを、本年からは完全な合同開催としました。当学会と JSSEES 受付分の自由論題報告が、所属学会を越えた形でテーマ別の分科会で構成され、両学会による合同研究大会が一層進化しました。合計で 11 件の研究報告が行われ、そのうち約半数が院生による報告となりました。

さらに、1 日目夜の懇親会では、飯降政彦天理大学学長のご臨席の下、会員相互間の交流が図られました。なお、天理大学からは、懇親会の補助として 6 万円を助成していただきました。さらに、2 日目の昼休みには、天理教教会本部の見学ツアーも実施されました。本研究大会開催にあたり、五十嵐徳子理事、JSSEES の阪本秀昭先生に多大なるご尽力をいただきました。

### 1. 研究大会の概要

#### (1) 共通論題第 1 セッション

##### 「日常の中の体制転換」

堀林巧（金沢大学）報告「中東欧の資本主義化と生活保障システムの変容：1989 年以後の軌跡」は、国家主導の資本主義化が行なわれた第 1 期、FDI 主導の資本主義化によって資本主義が成立した第 2 期を経て、経済危機の時代に至るという 3 つの段階に分け、この地域内部の種差性に着目しつつ、成立した中東欧資本主義の特質について考察したうえで、完全雇用の崩壊と雇用の質の劣化という条件のもとで生活保障システムがどのように変容を遂げ、それが貧困・格差という生活上の諸問題とどのように結びついているかを詳細に明らかにした。その結論のひとつは、1989 年以後の資本主義化の帰結は共産主義化以前にも遡る中東欧内部の「先進—後進関係の再生産」と見なすことができるというものであった。また、グローバル経済危機以降、1930 年代と同様の「制度化的趨勢」が見られるが、右翼権威主義の復活という 30 年代の再来を回避できるだろうか、という問題提起がなされた。

堀江典生（富山大学）報告「移民大国ロシアの軌跡—中国と中央アジアからの労働移動に着目して」は、世界でも有数の外国人労働者受入国（移民大国）となっているロシアの現状について、問題の認識、政策の展開、研究動向を踏まえつつ、フィールドワークを含む実証的分析をつうじて明らかにし、とくに自らのビジネスをロシアで積極的に展開し本国とロシアとを往来する短期ビジネス移民である極東の中国人と、欧露部からシベリアにかけてのロシア労働市場の底辺部に組み込まれた中央アジアの出稼ぎ労働者との類型的相違を浮き彫りにした。前者については、かつての脅威論から距離を置いた冷静な研究動向が紹介され、後者については、ゼノフォビアなどをともなう受入れ環境・体制の不備が課題として指摘された。

討論者である大津定実（大阪産業大学）、松本かおり（神戸国際大学）両氏のコメント、フロアと報告者との活発なやり取りをつうじてテーマが深められ、いくつもの研究課題が明らかにされた。

（司会：小森田秋夫 神奈川大学）

#### (2) 第 2 セッション「歴史の中の体制転換」

共通論題の第 2 セッションはパネル・ディスカッション形式で行われた。

まず塩川伸明（東京大学）会員が、歴史家、読者、

対象となる過去の間の時間的距離が同時代史では重要であると指摘し、またゴルバチョフは社会民主主義化を通じた体制転換の軟着陸（第一の終わり方）を目指したが、革命（第二の終わり方）に取って代わられたことを例として、「何が終わったのか」だけでなく、「どのように終わったのか」にも注目すべきだと述べた。

続いて柴宜弘（European Center for Peace and Development）会員は、旧ユーゴ諸国での旧体制ノスタルジーに言及しつつ、第二次大戦期や社会主義時代の捉え方について、世代や国で差があると指摘し、その上で近年の歴史の見直しとバルカン諸国での共通の歴史教科書作成について紹介を行った。田口雅弘（岡山大学）会員は、ポーランドの経済転換の事例に沿って「ワシントンコンセンサス」やEU加盟のコンディショナリティが強い影響力をもったと述べ、あわせてロシアと中国が冷戦後のアメリカを中心とする覇権枠組みの外に置かれていることが問題であると述べた。

最後に望月哲男（北海道大学）会員は、塩川会員の議論におけるロシア革命論、ロシア人自身によるロシア文化論の位置づけについて質問を行い、「変わらなかったこと」にも目を向けるべきと述べた。

その後、パネリストとフロアからの発言を含めて、ロシアの社会民主主義、歴史的クリーヴィジ、ロシア特殊性論などの捉え方、国際政治におけるロシアや中国の位置づけなどをめぐる活発な議論が行われた。

（司会：林忠行 北海道大学）

### (3)自由論題 分科会1

分科会1では、文学・語学に関する4つの報告があり、報告者それぞれが時間枠を概ね守って、まとまった発表をし、それに対して討論者が的確なコメント、質問をし、フロアからの質問も含め、活発な議論が行われた。

秋月準也（北海道大学大学院）報告「1920年代の喜劇手法について—ミハイル・ブルガーコフの戯曲を例に—」に対しては、「詐欺師」の表象を、同時代の文学にどう幅広く位置づけることができるのかという疑問が提出され、また、道化にはさまざまな形態があり、発表者がいう「正統的な」道化を明確化する必要があるという指摘があった。

佐藤貴之（東京外国語大学大学院）報告「古典の破壊」に対しては、「古典」あるいは「インターテクスチュアリティ」といった、報告者が分析に利用する諸概念の

使い方について疑問が提出された。

小林潔・堤正典（神奈川大学）報告「ロシア語教材を見直す—非専攻課程習得基準の策定を念頭に」に対しては、CEFRは政治的な意図もあり、無批判に受け入れていいのかという質問がなされた。また、大学の語学教育における教養と実用の乖離にどう対応するべきかについて議論が交わされた。

柴田恭子（ポーランド科学アカデミー哲学・社会学研究所）報告「スウォヴァツキ『リッラ・ヴェネダ』における「無辜の犠牲」幻想の分析」に対して、討論者が、広く知られてはいないだろうポーランドのロマン主義文学の見取り図を示したあと、フェミニズム的視点からの検討を加える必要があるのではないかという疑問を投げかけた。フロアからは、ポーランドの民族的意識をマゾヒズムという概念で語れるのかといった質問がなされ、議論が行われた。

（座長：ヨコタ村上孝之 大阪大学）

### (4)自由論題 分科会2

タチアーナ・スミルノーワ（Татьяна Викторовна Смирнова）（天理大学）報告「プーチン及びメドヴェージェフという姓からつくられた新語」（Неологизмы от фамилий Путина и Медведева）は、ПутинизмからМедведизмыまで、プーチン及びメドヴェージェフの姓にちなむ26の新語を取り上げ、その意味や用法を明らかにすることを通じて、プーチン及びメドヴェージェフという新旧大統領に対するロシア国民の評価や感情を鮮やかに活写した。

西山美久（九州大学大学院）報告「プーチン政権下における『愛国主義』政策の変遷—『カラー革命』とプーチン政権—」は、プーチン政権期の「愛国主義」政策の対象が全社会層から青年層へとシフトしていること、その背景には「カラー革命」があることを明らかにしたものであった。

雲和広（一橋大学）報告「ロシアの出生動向」（Explaining Fertility Trends in Russia）は、主として統計分析に基づく報告であった。雲報告は、2007年以降のロシアの出生率の顕著な上昇を「母親基金」などによる所得水準の上昇といった短期的要因でのみ説明することには慎重であるべきとか、国際的には女性就業率と出生率の負の相関が1980年代以降逆転しているとか、高学歴の女性はむしろ出生率が高いなど、非常に示唆に富むものであった。

## 地域研究学会連絡協議会

### ニューズレターより

#### 2010 年のロシア・東欧学会の活動

2009 年秋に役員が改選され、新体制が発足して約 1 年が経過した。上野俊彦代表理事のイニシアティブの下、学会活動の活性化を図るべく、以下のような新しい試みが実行に移された。

若手研究者を取り巻く研究環境が厳しくなっていることから、院生など若手研究者に対する支援制度を導入した。まず、奨励基金を設立して、研究大会で報告を行う院生会員に対して大会開催校までの旅費を補助するとともに、研究奨励賞を導入して、学会誌に掲載された若手研究者による優秀な論文を表彰した。また、院生間の研究情報の共有や院生の声を学会活動に反映させるため、院生会員専用のメーリング・リストを整備するとともに、学会とのパイプ役となる院生幹事を新設した。

広報委員会を拡充して学会広報のあり方を検討した上で、学会HPの刷新を行うとともに、年 2 回発行されているニューズレターの拡充を図った。また、学会誌『ロシア・東欧研究』の全てのバックナンバーが電子アーカイブ化され、学会誌のパブリシティが飛躍的に向上したことから、投稿論文の数が増加するとともに、学会誌の水準向上が期待されている。

年に一度の研究大会が天理大学（奈良県天理市）で開催され、引き続き JSSEES との合同大会となり、両学会合わせて約 100 名の会員が参加した。「体制転換の 20 年ーロシア・東欧の軌跡」をテーマとした共通論題では、通常の研究報告とパネル・ディスカッションを組み合わせたという新たな方式が採用され、総勢 10 名のスピーカーが登壇する充実した内容となった。また、3 つの分科会から成る自由論題では、所属学会を越えた形でプログラムが共通化され、報告の約半数が院生会員によるものとなった。

2012 年には、JCREES（日本ロシア・東欧研究連絡協議会）に加盟する JSSEES、ロシア文学会、ロシア史研究会の 3 学会との間で、第 2 回目の合同大会を計画している。専門領域が隣接する他学会との連携も強化する予定である。

（事務局長：兵頭慎治 防衛研究所）

小森吾一（日本エネルギー経済研究所）報告「ロシアの石油政策」は、『2030 年までのロシアのエネルギー戦略』等に見られるロシア政府のエネルギー政策の現状と方向性について、その詳細を明らかにするものであった。

分科会 2 の参加者は、報告により多少の増減はあったが、平均 30 人前後の会員が各報告に耳を傾け、限られた時間内ではあったが、活発な討論が行われた。

（座長：上野俊彦 上智大学）

#### (5) 自由論題 分科会 3

分科会 3 では、ソ連と東欧における国家と民族に関する若手の優れた報告が並んだ。

吉村貴之（東京外国語大学）報告「現代アルメニア政治に見る『本国』と在外同胞」は、アルメニアの国家・国民意識と、ディアスポラのアルメニア人との相互関係について検討した。本報告は、ブルーベイカーのいうホスト国とディアスポラの関係ではなく、アルメニアの場合本国と在外同胞の関係が重要であるとして、歴史的支配被支配関係、政党関係を分析した。

立石容子（東京大学大学院修了）報告「階級・民族・国民—スターリン期ソ連における国民史像の変遷」は、ソ連スターリン体制下から冷戦期に至る、階級から国民統合重視・民族認識の微妙な変容を、党・政府・歴史家と現実政治との関係において検討した。

最後に木村香織（モスクワ国立大学大学院）報告は、「ハンガリー系少数民族をめぐる各国の政策比較」と題し、第二次世界大戦後から冷戦の開始に至る時期におけるハンガリー系民族の、民族・国家・国境の問題について報告した。

吉村報告に対しては、本国とディアスポラの間を論じる際には、ナゴルノカラバフの虐殺をめぐる史実におけるハイポリティクスとの関係をより克明に追う必要性が喚起された。立石報告に対しては、階級・民族・国民を扱うに際し、政治と歴史学との関係、転換点の時代区分の明確化、30 年代の自国史形成の過程でのソ連「国民」の重層性、少数民族の国民形成との関係など、さらに多角的分析を進めることの重要性が指摘された。木村報告に対しては、国内政治体制、国家と外交の観点から、アクターの政策決定過程がどうなされていったのかの分析が必要であるとの指摘がなされた。何れについても時間が足りないほど活発な討議が繰り広げられ、盛会であった。

（座長：羽場久美子 青山学院大学）

## 院生幹事制度 メーリング・リストの導入

学会と院生会員との間のコミュニケーション及び院生会員間のネットワークの強化を目的として、院生幹事制度を導入しました。

院生幹事は、メーリング・リスト、研究大会時の院生会員連絡会などを活用して、院生会員の声を学会活動に反映させるとともに、院生会員間において研究情報の共有化を図ります。

一定の学会活動歴のある院生を公募した結果、理事会の承認を経て、以下の3名の院生会員にお願いすることとなりました。引き続き、若干名の院生幹事を募集しておりますので、ご関心のある方は事務局までご応募ください。

### 1. 院生幹事紹介

#### (1) 伏田寛範会員(代表院生幹事)

所属：京都大学大学院経済学研究科博士後期課程現代経済学専攻、D3（学修認定後在学中。D6相当）

専門分野：ロシア経済

研究テーマ：移行期ロシアの経済・産業政策の分析、特に航空機産業の再編・育成政策

指導教授：溝端佐登史先生、坂出健先生

その他：関西大学非常勤講師

一言：院生会員同士のつながりを緊密にすることで、お互いが励みあう関係を築くと同時に、私たち院生の声を学会に反映させてゆけるようにしたいと考えております。まずは皆様のご意見を伺いたく思います。今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。

#### (2) 加藤美保子会員

所属：北海道大学大学院文学研究科博士後期課程スラブ社会文化論専修、D3

専門分野：現代ロシア外交

研究テーマ：冷戦後のロシアのアジア太平洋政策、特に中ロ関係とアジア太平洋地域主義の影響

指導教授：岩下明裕先生、林忠行先生

一言：院生会員による研究活動の活性化に努めて参りますので、ご指導のほどお願ひ申し上げます。

#### (3) 富樫耕介会員

所属：東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻国際関係論コース博士後期課程、D2

専門分野：紛争研究、コーカサス地域研究

研究テーマ：チェチェン紛争研究（隣接地域も含む）、特に紛争発生要因についての研究

指導教授：中井和夫先生、塩川伸明先生

その他：日本学術振興会特別研究員、ユーラシア研究所研究員

一言：皆様のお力をお借りして、院生会員間の交流と情報共有、そして学会における活動の充実を目指していければと思っております。手探りで色々とお迷惑をおかけするかと思いますが、意見などお寄せ頂きながらご協力をお願い出来れば幸いです。

### 2. 院生会員メーリング・リスト(ML)について

学会運営等に関して、院生会員の皆様から幅広くご意見やご要望を受け付けております。事務局宛のメールアドレス、あるいは以下の院生幹事宛アドレスまでご連絡ください。jarees\_insei@yahoo.co.jp

また、院生会員間のコミュニケーションや研究交流、あるいは学会における院生会員の活動の活性化のため、院生幹事が情報共有・意見交換用のメーリング・リスト(ML)を作成しました。既に、研究会情報などの発信も開始しております。院生会員の皆様は、yahooグループでjarees\_inseiと検索されるか、

[http://groups.yahoo.co.jp/group/jarees\\_insei/](http://groups.yahoo.co.jp/group/jarees_insei/)にアクセスして下さい。近日中に「登録通知」のメールが届くかと思ひます。「登録通知」メールが届かない場合は、上記アドレスにご連絡下さい。なお、上記ウェブページからも参加手続きは可能です。

### 3. 院生会員連絡会

研究大会時に院生会員が集まり、相互のコミュニケーションや研究情報の共有を図ります。2011年の研究大会（東京国際大学）より実施します。また、次世代ワークショップなどの開催も検討する予定です。

### 4. 研究大会報告者への旅費・懇親会費の助成

研究報告を行う院生会員に対して、大会開催校までの旅費及び懇親会費の一部を助成しております。本制度は2012年の研究大会までを対象とし、現在、支給上限（2万円）の見直しも検討されております。

## 理事会, 総会の議事録より

2010 年第 2 回理事会及び総会が, 10 月 23 日に天理大学で開かれました。議事概要は, 以下の通りです。

### I. 理事会

#### 1. 事務局報告(兵頭事務局長, 防衛研究所)

(1) ニュースレター第 21 号及び会員名簿が 9 月上旬に発行されたことが報告された。

(2) 広報委員会からの提言を受けて, 学会 HP を刷新したことが報告された。

(3) 国立情報学研究所による HP サーバーの無償提供が 2012 年度末に終了することから, 新サーバーの借り上げを検討していくことが報告された。

(4) 2010 年度中間決算が報告された。

(5) 9 月初旬に年会費未納者に案内を再送したが, 10 月 20 日時点の会費納入率は, 法人会員 (4 法人) が 100%, 一般会員 (296 人) が 68%, シニア会員 (30 人) が 97%, 院生会員 (53 人) が 61% であり, 会員全体 (389 人) では 70% に上昇した。引き続き, 納入の案内を行っていくことが報告された。

(6) 入会者 5 名 (別表参照), 申請による退会者 6 名, 3 ヶ年会費未納による 13 名の退会が承認された。

#### 2. 会誌編集委員会報告(吉井会誌編集委員長, 神戸大学)

(1) 学会誌第 39 号に関して, 前回より多い, 12 件の投稿申込みがあったことが報告された。

(2) 電子ジャーナル化に伴い, 会誌投稿規定が修正されたことが報告された。

(3) 廣瀬陽子会員を編集委員に任命することが承認された。

#### 新入会員(2010 年 10 月理事会承認分, 受付順)

氏名 (敬称略)	所 属	専門分野	推薦者 (署名順)	
秋月 準也	北海道大学文学研究科 (院生)	20 世紀初頭のロシア文学	望月哲男	宇山智彦
貝田 真紀	筑波大学博士課程 (院生)	政治学	兵頭慎治	上野俊彦
山田 泰一朗	法務省法務事務官	ロシア・ユーラシアの安全保障	兵頭慎治	安達祐子
田畑 理一	大阪市立大学大学院教授	ロシア経済	堀江典生	大津定美
株式会社 エムオーツーリスト	CIS ロシアセンター (法人)		上野俊彦	兵頭慎治

### 3. 若手研究者研究奨励制度

(1) 研究大会報告者への旅費の支給につき, 支給上限 2 万円を見直すことが承認された。

(2) 宇多研究奨励賞選考委員長から, 浜由樹子会員を受賞者にする旨の選考結果が報告され, 同結果が承認された。

(3) 院生幹事 3 名 (伏田寛範・京都大学大学院, 加藤美保子・北海道大学大学院, 富樫耕介・東京大学大学院) が承認された。

### 4. 2011 年研究大会

(1) 大会開催校の左治木理事 (東京国際大学) より, 会場確保などの準備を開始することが報告された。

(2) 他学会との調整を踏まえた上で, 大会実施日を 10 月 22 日・23 日にすることが承認された。

(3) JSSEES との合同大会を継続することが承認された。

(4) 大会開催校の担当者が一名であることから, 負担軽減策を講じることが承認された。

### 5. 2012 年合同研究大会

2012 年に 4 学会合同大会を関西地区で開催することの JCREES からの提案が報告され, 大会開催校の諸事情を優先する形で検討していくことが承認された。

## II. 総会

### 1. 院生幹事及び研究奨励制度

(1) 院生幹事制度について説明がなされ, 3 名の院生幹事が紹介された。

(2) 若手研究者による研究奨励制度について説明がなされ, 研究奨励賞規定が承認された。

## 2009年度予算・決算、2010年度予算・中間決算(2011年1月13日現在)

収入の部					
	2009年度予算	2009年度決算	2010年度予算	2010年度中間	
前年度繰越金	5,660,010	5,660,010	6,339,315	6,339,315	
会費 (注1)	正会員	2,820,000	2,882,000	2,650,000	2,470,000
	シニア会員(注2)			150,000	160,000
	院生会員	210,000	178,000	170,000	154,000
	法人会員	60,000	80,000	80,000	70,000
	維持会費	20,000	15,000	0	0
寄付	20,000	41,312	40,000	37,000	
利息	1,500	475	500	285	
雑収入(学会誌の広告掲載料等)	80,000	160,000	100,000	40,000	
<b>当年度の収入合計</b>	<b>3,211,500</b>	<b>3,356,787</b>	<b>3,190,500</b>	<b>2,931,285</b>	
<b>収入総計</b>	<b>8,871,510</b>	<b>9,016,797</b>	<b>9,529,815</b>	<b>9,270,600</b>	
支出の部					
	2009年度予算	2009年度決算	2010年度予算	2010年度中間	
研究大会開催費	300,000	283,043	300,000	342,110	
会誌発行費	1,200,000	893,732	800,000	785,028	
ニューズレター発行費	100,000	68,675			
広報費(注3)			200,000	87,150	
事業費(注4)	40,000	35,000	40,000	30,000	
事務局費	400,000	399,672	300,000	101,516	
事務用品・コピー代(注5)	50,000	48,203			
会議補助費	700,000	630,536	700,000	253,820	
選挙管理費	100,000	81,784	0	0	
会員名簿作成費	100,000	0	150,000	105,000	
送料・通信費	200,000	116,895	150,000	68,310	
口座振替料金・振込手数料	40,000	41,262	50,000	35,480	
予備費(注6)	500,000	78,680	500,000	27,510	
<b>当年度の支出合計</b>	<b>3,730,000</b>	<b>2,677,482</b>	<b>3,190,000</b>	<b>1,835,924</b>	
<b>若手研究者奨励基金(注7)</b>			<b>1,000,000</b>	<b>164,100</b>	
<b>次年度への繰越金</b>	<b>5,141,510</b>	<b>6,339,315</b>	<b>5,339,815</b>		
<b>支出総計</b>	<b>8,871,510</b>	<b>9,016,797</b>	<b>9,529,815</b>		

注1 2010年度予算案は、正会員83%、シニア会員90%、院生会員70%、法人会員100%の納入率で試算。

注2 2009年度予算・決算の一般会員にはシニア会員を含む。2010年度予算案よりシニア会員の項目を独立。

注3 2010年度予算案より新設(ニューズレター発行費、ホームページ作成費、電子アーカイブ化関連費用)。

注4 日本ロシア・東欧研究連絡協議会(JCREES)及び日本学術会議地域研究学会連絡協議会の分担金。

注5 2010年度予算より事務局費に統合。

注6 2009年度決算は、理事会開催時の施設使用料、ホームページ管理費。

注7 予算から別立てとし、2010～2012年の3年間で執行。研究奨励賞副賞、院生会員の研究大会参加補助費。



## 2. 予算・決算

(1) 2009 年度決算に関し、2009 年度予算よりも大幅に少ない執行になったことが報告され、同決算が了承された。

(2) 岩田会計監事より、2009 年度の会計業務及び財産状況を厳正に監査した結果、いずれも問題がないことが報告された。

(3) 2010 年度予算が承認されるとともに、2010 年度中間決算が報告された。

## 3. 会誌編集委員会報告

(1) 学会誌第 39 号に関して、12 件の投稿申込みがあったことが報告された。

(2) 学会誌のバックナンバーが電子ジャーナル化されたことが報告された。

(3) 電子ジャーナル化に伴い、会誌投稿規定が改正されたことが報告された。

## 4. 2011 年, 2012 年研究大会

(1) 2011 年度の研究大会を東京国際大学 (埼玉県川越市) で開催することが報告された。

(2) 2012 年度の研究大会は、4 学会合同で実施することが JCREES (日本ロシア・東欧研究連絡協議会) で検討されており、これに合わせて大会開催校の選定を進めていくことが報告された。

## 5. 研究奨励賞授与式

(1) 宇多選考委員長より、浜由樹子会員が研究奨励賞を受賞者したとの選考結果が報告された。

(2) 上野代表理事より、浜会員に対して賞状と副賞が手渡され、浜会員から受賞の挨拶があった。

## 会誌投稿規定, 執筆要領の改正

天理大学における理事会及び総会での報告・承認を受けて、学会誌『ロシア・東欧研究』の会誌投稿規程及び執筆要領の一部が改正されました。改正された部分は、下線部分となります。

改正の主な理由は、電子ジャーナル化に伴う著作権問題への対応と、研究奨励賞の資格確認のため投稿時に生年月を提示することです。

### 会誌投稿規程(改正版)

1. 投稿資格 原則として、当学会会員とする。
2. 原稿内容 ロシア・東欧・旧ソ連地域に関する学術論文(以下論文)、研究ノート、書評、資料紹介等とし、未発表のものに限る。
3. 原稿枚数 原則として、論文は 400 字詰め原稿用紙 40(16,000 字)以内、研究ノートは 20 枚(8,000 字)以内、書評・資料紹介等は 10 枚(4,000 字)以内とする。この枚数には図表、注、参考文献も含まれるものとする。欧文の場合もこれに準ずる(論文の場合は 6,500 語程度)。
4. 使用言語 審査及び印刷の関係上、使用言語は日本語、英語、ロシア語のいずれかとする。
5. 執筆要領 別に定める執筆要領に従うこととする。
6. 原稿審査 提出された原稿は、特集論文を除き、審査の上掲載を決定する。論文は、1 編につき編集委員会が依頼する 3 名の会員により審査を行う。その他の原稿は編集委員会において審査を行う。なお、審査の過程において、編集委員会より、原稿の手直しを求めることがある。
7. 投稿方法 投稿希望者は、年報発行前年の 9 月 15 日までに、氏名、所属、職名(大学院生の場合は課程、学年など)、住所、電話、Fax、e-mail アドレス、論文・書評などの別、予定のタイトル・枚数を書き、編集委員会まで申し込むこと。

**8. 採択論文等の公開 審査の結果、採択された論文、研究ノート、書評、資料紹介等は、会誌に掲載されるとともに、発行後 1 年を経て電子ジャーナル化され、無料で公開される。**

**9. 著作権 会誌に掲載される論文等の著作権は、当学会に帰属する。原著者が、会誌に掲載された論文等の一部あるいは全部を論文集への再録などの形で複製利用しようとする場合は、事前に当学会の許可を得ること。原著者から申し出があった場合、原則として、申し出は受理され、複製利用は許可される。**

附則 この規定は、2010 年 10 月 23 日より施行される。

### 会誌執筆要領(改正部分のみ掲載)

2. 表題・執筆者名  
表題、執筆者名、**連絡先(住所、電話、Fax、e-mail アドレス)**、**生年月**は本文とは別の用紙に記し、執筆者の所属(大学の場合は学部・研究科等)、職名を付す。大学院生の場合は課程、学年等を明記する。表題及び執筆者の氏名・所属・職名の英語表記を併記する。

## 2012年4学会合同大会 同志社大学にて開催

当学会も加盟するJCREES（日本ロシア・東欧研究連絡協議会）から、ロシア・東欧学会、JSSEES、ロシア文学会、ロシア史研究会の4学会による合同大会を、2012年に関西地区で開催したいとの提案を受けました。これは、当学会が中心となり2008年に名古屋学院大学で実施した合同大会が有意義であったことから、4年に一度の頻度で継続しようというものです。

昨年12月に行われたJCREES幹事会で、4学会の代表が以下の事項に合意しました。①参加学会の中から主務学会を選び、合同大会の運営を行う。主務学会はローテーション形式とし、2008年はロシア・東欧学会が担当したことから、2012年の主務学会はロシア文学会とする。②参加学会が学会員規模に応じて公平に負担する。③合同大会の会場は同志社大学（京都市）とし、同校の諫早勇一氏（ロシア文学会会員）が開催校委員となる。④参加学会より1名の委員を選出して構成される合同大会準備実行委員会によって行われる。

なお、同志社大学における合同大会は1日のみとなり、残りの1日は当学会が主催する通常の研究会を当学会の大会開催校で実施することとなります。今後、速やかに大会開催校を調整する予定です。合同大会の企画に関しまして、何かご意見やご提案がございましたら事務局までお寄せ下さい。

## 若手研究者フェローシップ募集中

日露青年交流センターより、2011年度若手研究者等フェローシップ《日本人研究者派遣》《ロシア人研究者招聘》プログラムの実施についてご案内があまりました。

本事業は、2011年12月までに渡航する原則として40歳以下の研究者を対象に、日本人若手研究者等のロシアにおける研究及びロシア人若手研究者等の日本における研究を支援することを目的としております。詳細は、日露青年交流センターHP（<http://www.jrex.or.jp/ja/bosyu.html#fellow01>）をご覧ください。締め切りは、2011年4月8日必着です。

## 事務局からのお知らせ

### 1. ホームページのリニューアル

広報委員会による検討結果を踏まえまして、学会HPをリニューアルいたしました。現在、国立情報学研究所からHPサーバーの無償提供を受けておりますが、2012年度末で終了するため、今後、新サーバーの借上げを検討してまいります。

### 2. 会員名簿の訂正

23ページの杉山会員（北陸AJEC調査部長）のお名前は、下記の通りです。お詫びして訂正いたします。

（誤）杉山 昌樹 → （正）杉山 正樹

### 3. 2010年度会費納入のお願い

まだお支払いがお済みでない方は、お早目の納入をお願いします。規定により、一年以上未納の方には学会誌等の送付を中断し、3年未納となりますと理事会の承認を経て退会扱いとさせていただきます。

《編集後記》

通常、ニューズレターの発行は年2回ですが、新しく導入された研究奨励賞や院生幹事制度、学会規程の新設や改正が相次ぎましたので、増刊号として発行いたしました。また、本号では多くの皆様にご寄稿いただき、ありがとうございました。（兵頭、岡田）

## ロシア・東欧学会ニューズレター

第22号(2011年2月発行)

《発行》事務局長 兵頭慎治

《編集》広報委員 岡田美保

住所：〒102-8554

東京都千代田区紀尾井町7-1

上智大学外国語学部ロシア語学科 気付

FAX: 03-3238-3087

E-mail: [jarees\\_office@yahoo.co.jp](mailto:jarees_office@yahoo.co.jp)

<http://www.soc.nii.ac.jp/roto/index.html>

ゆうちょ銀行(加入者名:ロシア・東欧学会)

郵便局での払込:00150-8-177731

他行からの送金:019店 当座 0177731